

はじめに

現代に限らないが、たとえば政治・経済などの実際の社会において、人間が構築し、かつ捨棄してきた様々な思想や構造を考察の対象とするとき、そこに私たちを超越したり、あるいは身心の内部に内在するような異次元的存在を想定する必要はない。

しかし、世界の多くの普遍的・制度的宗教や、ある地域の具体的民俗宗教を取り上げると、そこには政治・経済などの強力な剛構造とは別のシステムを考えることができる。すなわち、政治的権力や経済的利益とは別の体系をもった神・仏・霊性・宇宙などの通常の生活とは時間的、空間的に次元を異にした位相を示すものを、我々は、仮に「聖なるもの」と呼んでいる。

「聖なるもの」という表現は、古くは旧約聖書に登場し、また20世紀前半に一部の神学者、宗教学者、哲学者によって取り上げられたが、宗教における意味と作用を体系的に考察する場合には、依然として有効な概念と確信している。

各宗教文化の中に生き続けている「聖なるもの」を、その形と場という具体的表象を通して解明するために、平成11年度から国際日本文化研究センターの共同研究「聖なるものの形と場」を立ち上げた。

共同研究会のメンバーとしては、世界の主要宗教である仏教、キリスト教、イスラーム教はもちろん、神道、ヒンドゥー教、道教などの研究者にも参加いただいたのみならず、心理学、社会学、歴史学、美術史、考古学などの関連する領域や方法論からもこの「聖なるもの」にアプローチしようとした。

その際、最初に「聖なるもの」とは何かという大前提を徹底的に議論して、先に概念的合意を策定することは避け、むしろ種々な分野、様々な方法論によって、「聖なるもの」に迫ろうとした。結果、いささかの重複や後戻りもあったが、共同研究を重ねる中で、次第に共通の認識が醸成されてきたことは代表者として喜びに耐えない。

そこで最終年度に、国際日本文化研究センターの主催により、平成13年の11月に、5日間にわたって、国際研究集会を開催し、外国からの研究者13名、国内の研究者70名を越える参加をいただき、「聖なるもの」の形と場という切り口から興味深い発表と有意義な議論が展開された。

ここに報告書を刊行するにあたって、発表者と参加者にあらためて御礼を申し上げるとともに、機会を与えていただいた山折哲雄所長をはじめとする国際日本文化研究センターの各位、とくに編集・出版業務に御尽力いただいた皆様に心から感謝の意を表したい。

本報告書が、新たな刺激となって、一見抽象的な「聖なるもの」の意味・作用・構造がさらに深められることを願っている。

編者 頼富 本宏